地底にて

文　画

砂糖蜂　鋼鉄蝿

「生きているか？」
声は上から降ってきた。
すらりと伸びた、巻脚絆の脚が二本。膝から奥は、毛織りマントの中に消えている。
生きてる、何とか。そう答えた。
「なら立て」
細い腕が伸びて、上半身を支えてくれた。意外に強い力だ。
水が服の中を伝った。地下水脈を、どこまで流されてきたのだろう。
カンテラの灯。フードの中から、キラキラ光る両目に見つめられていた。
「大きなケガはない。おまえはとても運がいい。歩けるな？」
澄んだ明るい声が、坑内に響いた。声変わりはしていない。
僕と同じくらいのくせに偉そうだ。でも悪い気はしなかった。少年なら、いい。
何をしゃべったらいいか、めんどうくさくなくて、いいから。
僕が暮らす街の地下には、巨大な空間がある。大昔に作られた、謎の遺跡群だ。
降りていく大人は、今になっても、めったにいない。
そう遠くない昔、地下には怪物たちがひしめいていた。
父によると、潜ったやつは、たいてい食われたということだ。
しかし、僕が入ったころ、もうそこは、静かな死の世界に変わっていたようだ。
話に聞いた怪物たちは、一匹もいなくなっていた。
学校を早引けして、ガス探知機と七つ道具を背負って、僕は毎週、探検に出かけた。
父はアカデミーで夜遅くまで帰ってこないし、恋多き乳母は何かと忙しかった。
僕は鉱石のかけらや化石を拾って、引き出しに少しずつ隠した。
そのうち、同じように一人で探検をしている連中にも気づいた。出会ったときは名乗らないのが、お互いのルールだ。でも弁当や水は分け合った。そんなものだ。

ここは帝都の土踏まず。僕にとっては、温かくて小さなふるさと。
巨人がすべてを踏みつぶした気でいても、地底には、彼を無視する権利があったのだ。
油断していたのだろう。あんな影に驚いて、水路に足を滑らせるなんて。
「たぶん、この遺跡の攻性生物は、ほとんど死んだんだ。大崩落のおかげだな」
「そうか」
新しい道連れは、急に機嫌が悪くなったように見えた。
「一番近くの、地上に出る道を知りたい。君は、どこから？」
「不可解だ」
フードと襟巻きの下で、ぼそぼそと唇が動いた。
子供が台本を読んでいるみたいに、ぎこちない話し方だと思った。
「逃げ出してきたのに、帰りたいと願うのは。なぜだ？」
カンテラの灯が揺れる。ぴったりとした黒い革手袋をはめた、細い五本指。
「……まあ、いい。ついてこい」
ついていくしかなかった。僕のコンパスは水路の彼方だ。
「一番深いところは、外側に通じているものだ。たぶん」
連れは食料を持っていなかった。貰った飴玉があるからだいじょうぶ、そう言った。
「部品を集めている。『別の自分』になるための」
地下道が深く入り組んでくるにつれて、連れの言葉はますます謎めいていった。
どうして遺跡に潜ったかを訊ねたら、自然とそういう流れになったのだ。
「ある人……、人々に、とてもひどいことをしたんだ」
行間を読むには唐突で、説明が少なすぎた。学生悲劇みたいだ。
「だから駄目、会いに行けない」
教室の中だったなら、僕は台本をとりあげただろう。深刻ぶったセリフどもに赤鉛筆で線を引き、薄っぺらな級友たちと一緒になって、三日連続で笑い者にしただろう。

僕は連れを笑わなかった。知っていたからだ、地底の言葉が本物であることを。
たまに一休みさせてもらえた。連れは残り少ない飴玉をくれ、僕は空腹をごまかした。
「さっさと謝りに行けば？　こんな薄暗い場所で自分探しなんかしてないでさ」
言葉だけなら、何でも言えた。
出口は見つからない。僕たちは飲まず食わずの迷子のままだ。
連れが、天井を見上げた。襟巻きが下がって、白い喉が覗いた。
僕はその、カンテラの灯の反射から目をそらした。
「おまえの母親が戻ってきたとして」
僕は呼吸を止めた。
「謝ってくれれば、おまえは彼女を許すか」
「……どうして？」
「すまない」
流れ込んでくるんだ、ここは〈近い〉から。すまない、そんなつもりじゃなかった、
そんなことを、歩きながら、ひとしきり言われたような気がする。
遺跡の最深部には、地底湖が広がっていた。水は美しかった。
腹いっぱい飲んだら、動けなくなった。いったい何日歩き続けた後だったろう？
「もう歩けない」
僕は言った。立ち上がれなかった。
「行ってくれ、君の目的地に」
連れは背筋を伸ばしたまま、じっと僕を見下ろしていた。
「足手まといだったかもしれないけど、久しぶりに、誰かと話せた。嬉しかった」
「リーバック」
僕はもう目を閉じていたと思う。そうだ、彼女は僕の名前を知っていたのだ。
「あのさあ、母さんのことなんだけど」

細い指が、僕の汚れた頬に触れた。
「僕はあのひとを許さないけど。ほんとうは、会いたいよ。もういちど」
「もういちど？」
「うん、もういちど」
ここから先の記憶はない。
乳母によれば、僕はいつもの坑道の入り口で寝ていたらしい。
足の裏を豆だらけにして、ぼろぼろの襟巻きをかけて。

ドローンに性別はない。魂もない。彼らは決して笑わない。
でも、夢は自由だ。
アカデミーで彼女の正体を知った後でも、僕が幾つになったとしても。
夢の中、微笑んで、彼女は色違いの脚を組んで座っている。
みぞおちから下の全身は白く、ぼんやりと光っている。僕は少女をそこに見る。
僕は呼ぶ。
あのときは知らなかった、その君の名前を。

「アゼル」

彼女も、僕を見ている。
キラキラした大きな両目で、不思議そうに、こちらを見ている。
少女なら、いい。少女であってほしい。
もう一度、僕の名前を呼んで、そして笑ってほしい。